

苧萱桑門筑紫櫟

『守宮酒の段』あら筋

娘の使節に

キモリをのませ

情愛に絡ませ寶を守る

石童丸の家の名寶騷動

筑紫の大名加藤左衛門繁氏は酒杯に散る櫻花に無情を感じ、假睡のうちに、F妻と側室とが互に瞋炎を燃やす髪のもつれを見て發心し、高野の山深くのがれる、

時に豊後の大領大内義弘は、朝と偽り加藤家に傳はる寶石夜光珠を強要する

二 加藤家 一の執權監物太

郎は二十歳を過ぎた處女でなければ手を觸れることも出来ないからと、事を構へて断つたが、大内家では、これに相當する多々羅新洞左衛門の娘夕しでを使者として夜光珠を受取りに来るそこで監物太郎は一計を案じ、美男の弟女之助を迎へに出しゑも酒をすゝめて夕しでの心を濁かしてしまふ

二 夕しで士 は偽りの黒玉

を渡されるが、も早や何ともいふことの出来ぬ身となつてしまつたので夕しでは自害して申講をする新洞は怒つて監物に詰めよつて見たが、たつた一人の娘が一生に一度の男と知つては心を折れ、名玉も受取らずに立ち歸るといふ筋である



と夫太靱古
郎次友の絃

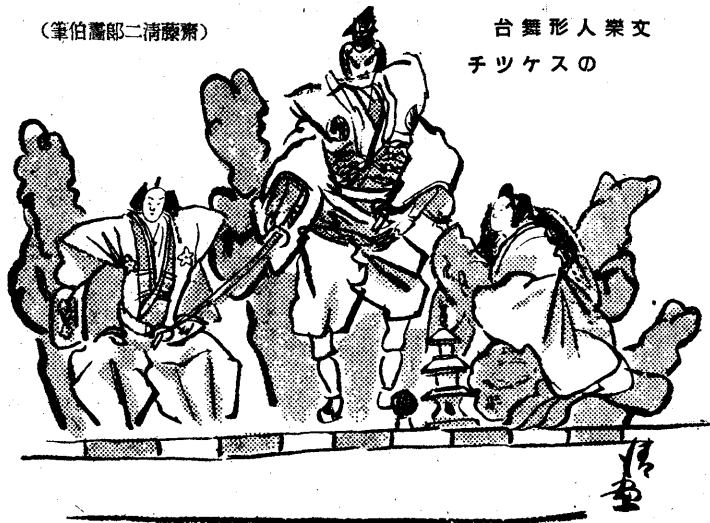
廿八年振りに上演された

珍らしい「守宮酒の段」
人形浄るり

今夜七時四十五分 大阪文楽座より中繼

四ツ橋^{ワシ}の舞^{マヒ}、青柳^{アヲヤナギ}に風蕪^{カゼウ}る六月の文楽座^{モノワケ}申中
 総^{ソウ} 藝^{ゲイ} 題^{タイ} は石^{イシ} 章^{ショウ} 丸^{マル} の真^{マコト} 話^{ワタシ} で知^し られた「^{守宮酒の段}」
 藝^{ゲイ} 師^シ 友^{トモ} 次^ジ 郎^{ロウ} が秘^ヒ 藏^{ザウ}
 遺^イ 産^{サン} 珍^{チン} 寶^{ホウ} 物^{モノ} 類^{レイ} 様^{サマ}」守宮酒の段である
 ▼……これに續く「高野山の段」は歌舞伎を
 初^{はつ} め、その他の音曲^{ネンキョク} で、あまりに有名で
 あるが「守宮酒の段」は、今日では歌舞伎
 にも殆んど上演されず、浄るりとしても
 現存の師匠中、誰一人知る者もないほど
 の廢曲に近い珍らしい曲である、先代津
 太夫がよく語つたが、文楽座の手摺にか
 かつたのは明治卅九年、攝津大掾が演じ
 たのを最後として今日におよんでゐる
 ▼……今度の上演は、編^{ヒト} 譯^{ワカ} 友^{トモ} 次^ジ 郎^{ロウ} が秘^ヒ 藏^{ザウ}
 してゐる五行本の朱^{しゆ} を辿^{たど} つて復^{たが} 活^{かつ} せしたも
 ので、實^{じつ} に廿八年振りに語^{かた} られる浄^{じやう} るり
 ある、語^{かた} り手^て は中^{なかつ} が文^{ぶん} 楽^{らく} の中^{なかつ} 野^の 太^た 夫^ふ、
 切^き が將^{まさ} 來^{きた} の紋^{いづ} 下^げ をもつて目^め せ^め られる古^{ふる} 柳^{やなぎ} 太^た 夫^ふ、
 物^{もの} 語^ご の内^{うち} 容^{よう} はともかくとして、相^あ 當^{たう} 注^{ちゆう}
 目^め に値^あ する浄^{じやう} るりである

文楽人形舞台
子ツケスの



(筆伯蘆郎二清藤素)